

FIVE VALUE ASSET

Monthly Newsletter

5 バリュースト通信 Vol.12

Date of issue: 2025.10.15

平素よりお世話になっております。5 バリューストセットでございます。今月もマンスリーレターとして5 バリュースト通信をお届けいたします。マーケットニュースのご案内の他に、時事に関するコラムなどを月に1回お届けいたします。お楽しみいただけますと幸いです。

Interview メンバーの言葉

私は歩くことが嫌いではありません。かつて社会人のワンダーフォーゲルに所属してトレッキングや夏山を楽しみましたが、最も思い出深いのはワンゲル活動で登った山々やルートではなく、二度歩いた奈良の「山の辺の道」です。

日本最古の道と言われる山の辺の道を知ったのは、写真家の入江泰吉さんの作品に触れたときだと記憶します。水面に映る薬師寺東塔、暮色に染まる二上山、朝靄に煙る東大寺大仏殿、凜とした阿修羅像など、奈良を題材とした印象深い作品が蘇ります。入江泰吉さんによって奈良への憧れが増し、いつか山の辺の道を歩きたいと思うようになりました。

初めて歩いたのは高校生の時です。石上神宮からスタートし、その名とは裏腹に石碑しかない内山永久寺跡、竹之内環濠集落、崇神天皇陵、景行天皇陵などを経て大神神社までを二上山を右手に仰ぎ見ながら歩き、途中、長岳寺でお素麺をいただいたのも良い思い出です。入江泰吉さんの作品に触れたこと、山の辺の道を歩いたことはこれまでの人生を彩ってくれた素敵な経験であり、これからも記憶に残り続けます。

私はお客さまのウェルスマネジメントをお手伝いしています。お客さまのお役に立つことができ、そのご縁でお客さまのご記憶の端に残ることができたとしたら、私にとって望外の幸せであり、とても嬉しいことに違いありません。



社長室長
青野 純一良

Topics 今月のトピックス



10 Oct 2025

- Seminar Report
- Fiscal year of America
- Company's characteristics



- ・「文学からお陰様を学ぶ～なぜ今、文学なのか」（第9回オフサイトセミナー）
- ・米国の会計年度はなぜ10月から？
- ・Presentation: 5 バリューストセットの特色・独自性について (2)

Seminar Report 「文学からお陰さまを学ぶ ～なぜ、今、文学なのか～」

当社ではお客さまと社会に役立つ存在を目指し、経営哲学・理念の共有や、精神性の修養に努めるべく、外部講師をお招きしてのオフサイトセミナーを定期的に催しております。今回は文筆家、フリースクール東京 y's Be 学園実学講師の仁平千香子先生にご登壇いただいた第 9 回オフサイトセミナー「文学からお陰様を学ぶ～なぜ今、文学なのか～」(2025 年 9 月 19 日)をご紹介します。



日本語は「間(あわい)」(境界、はざま、グラデーション、重なるところ、大きな流れに巻き込まれて物事が良い方向に進む「おかげさま」でなりたつ関係)を特長とする言語ですが、現代人は「間」を忘れており、そのことが生きにくさに繋がっているという考察を踏まえ、仁平先生は文学が「間」を思い出させる一助になると指摘されます。

前半では文学の効能、記憶偏重・数量/結果主義に陥っている現代教育、パフォーマンス主義、^{あわい}「間」を強調するという日本語の特徴や、今日の高度情報化社会では「0 か 1」、「白か黒」、「(幼兒的な)好き嫌い」というように、^{あわい}「間」のようなグラデーションが排除された価値観が支配的になっていることなどをお話いただき、二項対立的な価値観が覇権的な状況だからこそ、文学を通じた学びが重要になってくるのではないかと、という指摘もありました。「今、なぜ文学か」という問いに対する返答の一つとして、「断片的な情報に囲まれる現代では『間』を忘れがちになってしまいうため、文学を通じてそれを思い出したり、多様性や物事のグラデーションに気づき、余白について熟考する視点を持つため」ということを、仁平先生のお話を通じて考えました。

現代では「ファスト教養」「倍速視聴」「コスパ/タイパ(コスト/タイムパフォーマンス)」などが求められる傾向にあり、教育現場においても「じっくり」より「たくさん」、「考える力」より「覚える力」、「わかる」より「知っている」が重視され、「時間がかかり、正解がなく、白黒はつきりせず、成果がすぐにでない」文学が現代人から敬遠されるのも致し方ないとも、仁平先生は述べられます。

日本語は^{あわい}「間」の言語であり、主語をできる限り避ける、自分を指すことば(一人称)は、身分・立場・距離といった他者との社会的関係で変わります。さらに、「自分」という言葉は「私」を指すだけでなく「あなた」を指す場合がある、自動詞を好むといった特徴もあります。一方、他動詞を好む英語は、常に「〈誰〉が何をする」を明示する必要があり、配布資料に掲載の例文では「お茶が入りました / I made tea for you.」(主語なしの英訳: Tea has entered.)などがあり、英語における一人称はフラットな「I」に、ほぼ収束されてしまいます。

日本語を母語としている場合、日本語という言語の持つ奇抜性に対して無頓着になりがちですが、日本語を客観的に考えたり、『文章は接続詞で決まる』(2008)など石黒圭さんの著作が代表的な日本語学に触れたり、日本初の近代国語辞典『言海』をモデルにした『大航海』の編集に携わる人を描き、映画・アニメ・ドラマ版などにも展開された三浦しをんさんの小説『舟を編む』(2011)などを知ることでも、言葉・文学に対する理解が大きく広がると思います。

後半の作品分析では芥川龍之介の「蜜柑」(1919)がメインとして取り上げられました。同作は疲労と倦怠を感じる「私」が、横須賀発の汽車で乗り合わせた田舎者の娘(故郷から奉公に出る)を見て苛立っていると、娘が窓を開け、見送りにきていた弟たちに蜜柑を放り投げる様(「与える」という利他的な行為)を見たことで、男は「云ひようのない疲労と倦怠」、「不可解な、下等な、退屈な人生」を「僅かに忘れる事が出来た」と語られる短編です。

また、配布資料には「蜜柑」の抜粋と共に、「なぜ蜜柑なのか」「なぜ娘の与える姿を見て癒やされてしまうのか」といった(明確な答えのない)問いが添えられていました。^{あわい}「間」について想像力を巡らせたり、「心を踊らすばかり暖かな日の色に染まつてゐる蜜柑」といった比喩表現を尊むように作品や言葉に接し、先のような問いに対する答えを推察することで、答えのない余白について自分の意志で考える力、感性や想像力を養う契機になると考えられます。

本稿を執筆現在、米国政府機関の一部閉鎖（シャットダウン）が続いています。同国の会計年度は 10 月 1 日が開始日、すなわち新年度入りしているのですが、議会はそれまでに 12 本の歳出法案を全て可決しなければなりません。それが叶わない場合は、短期のつなぎ予算を成立させ暫定的に現行の歳出を延長し連邦政府を動かすようにします。ところが、現時点で歳出法案の成立はゼロ、つなぎ予算も成立していないため、新年度入りした 10 月 1 日以降、政府機関を動かさなくなってしまっているのです。影響は意外なところにも表れていて、10 月 5 日に予定していた横須賀市の花火大会は中止と相成りました。花火会場の観覧場所を予定していた米海軍横須賀基地のフレンドシップデーが、シャットダウンのあおりで基地を開放出来なくなり中止となったからだそうです。

このシャットダウンについては既にニュース解説やレポート等が多数出ており、皆様も先刻ご承知とは思いますが、米議会における共和党と民主党の対立が主因であり、多分に政治的な問題です。経験則上、相場予測に政治を持ち込むと碌な結果にならない事を身に染みて感じておりますので、このお話しはここまでにしたいと存じます。それよりもっと柔らかなテーマを取り上げましょう。それは米国政府の会計年度の時期についてです。学校年度は 9 月から（これは農業が関係するそうです。かつて貴重な労働力であった子供たちは、夏の繁忙期が過ぎてからでないと学校へ通えなかったのです）、企業会計は 1 月からが多い中、なぜやけに中途半端な 10 月スタートなのでしょう？カレンダー通りに 1 月スタートが自然な成り行きの様な気がしますよね。実際、ドイツ、フランス、イタリア、中国、ロシアなどは 1 月から 12 月を会計年度としています。

実はその時々政権の都合により恣意的な変更が行われてきたから、が事の真相のようです。もともと米国でも 1 月から 12 月の時期もあったようですが、1868 年からは 7 月～6 月に変更となっています。（その理由については調べが付きませんでした。ご存じの方はご教示いただけますと幸いです。）以来、7 月スタートが 1976 年まで比較的長く続きます。ところが 1976 年の予算審議が長引き、時間を稼ぐよう法改正がなされ、1976 年 7 月から 9 月までを移行四半期としてカバーし、新たに 1976 年 10 月から 9 月までの会計年度となったのです。要は 1976 年に 3 カ月遅らせたから 10 月スタートとなったのですね。意外と歴史が浅いことに驚いた次第です。ちなみに米国では州毎に会計年度が異なるのですが、大半は 1976 年以前の連邦政府と同じ 7 月スタートとなっています。政府、州、企業、学校でそれぞれ会計年度が異なるのは結構難儀なこととお察しします。

では、企業会計年度を除くとほぼ 4 月スタートで統一されている我が日本はなぜ 4 月なのでしょう。桜の開花時期に合わせたから、などという雅な理由であれば微笑ましいのですが、実態は米国と変わりがないようです。明治政府により初めて会計年度が制度化された明治 2 年は 10 月スタートでした。これは新米の収穫時期に合わせたそうです。すぐ後の明治 6 年から 1 月スタートに変更されます。表向きは旧暦から新暦への改暦に合わせたこととなっていますが、裏の事情もあったようです。旧暦だと明治 5 年は 12 月が 2 日しかなく、官吏への報酬は 12 月を切り捨て 11 か月分で済みます。ところ翌明治 6 年は旧暦だと閏月があるので 13 か月分支給しなければなりません。そこで明治 5 年は旧暦、明治 6 年は新暦で支出を最小限に抑えた形としたのです。

明治 8 年からは地租改正に合わせ 7 月からとなりました。ここで偶然ですが米国と同じ会計年度となります。ところがまた大きな変更が明治 17 年に起こります。当時は富国強兵のスローガンの下、軍事費が激増し財政収支が悪化していました。そこで時の大蔵卿松方正義は奇策を講じます。翌明治 18 年の予算の一部を明治 17 年分に繰り入れてしまったのです。当然明治 18 年の予算は収支が厳しくなりますが、さらに手を打ちます。明治 18 年の会計年度を 7 月から 3 月までと 3 カ月短縮し、明治 19 年から会計年度を 4 月から 3 月までと改正したのです。そしてそのまま現在まで至っているという訳です。

つまり、日米ともに会計年度は 7 月スタートであったところから、米国は 3 カ月延長して 10 月からに、日本は 3 カ月短縮して 4 月からとなったのです。何やら妙なご縁を感じざるを得ません。善し悪しはさておき、次の一手が全く読めないのがトランプ大統領です。このままシャットダウンが長引けば、1976 年以來の会計年度の変更、という荒業を捻り出してくるのかも知れません……

Company's characteristics 当社の特色や独自性について (2)

当社では週例ミーティング後、勉強会の一環として5バリュー発表と題した持ち回りの発表を行っています。前号に引き続き、当社の特長を社外の方にどう伝えるかというテーマで、2025年7月から9月にかけて行ったものから、内容の一部をご紹介します。今回のテーマ発表は、特に求職される方に向けて当社の特色を説明するという想定で行いましたが、社員にとっても、各人の考えや視点を共有する機会となりました。



企業の絶対的な強みを獲得し、売り上げ拡大、利益獲得に繋げるためのポイントとして、コア・コンピタンス（競合他社を圧倒する得意分野）の構築や、オンリーワン企業を目指すということが言われてきました。5バリューアセット（5VA）はIFA業界のみならず日本の金融業界においてオンリーワンの地位を構築できる要素を持っていると確信しているので、その点が求職者に高い訴求力を持つと思います。（青野 純一良 社長室長）

同業他社が提案の柱に置くことがほとんどない外国債券を中心に据え、本来の意味でのクライアントファーストを実行していけることが、5VAの特徴と考えます。5VAは、お客さまの声やニーズを汲み取り、それぞれのニーズに沿って個別の提案を行える体制があり、それを実行していける会社であり、お客さまに対する継続的なフォローアップを行う責任を持っています。他社とは一味違った外債という商品をメインに置いて、お客様のニーズに合った提案を行い、きちんとしたフォローを継続していくという点が、他社にはない5VAの強みや大きな特徴だと思います。（鐘ヶ江 伸 チーフ・マーケティング&プロダクトオフィサー）

あらゆる商品を手広く扱うのではなく、債券に絞り込んで専門性を高めるという集中があるからこそ、5VAは債券市場の細かなニュアンスや性格などを捉え、お客さまのニーズに合う提案ができるのだと思います。また、少数精鋭という5VAの規模だからこそ、トレーディングチームが作成した分析資料が、IFAのお客さまへの提案やお客さまとの信頼を築くことに役立っているかをすぐに確認できるという良さがあります。（ロペス・ペニエル ジュニア・マーケティング&プロダクトオフィサー）

5VAは長期運用に適した債券販売に特化しているので、長期での資産運用やリレーション維持が前提となり、より長いスパンでお客さまの人生に付き合いながらの提案が必要となります。単なる資産運用ではなく、お客さまの生活や将来の安心、幸せなどを考え寄り添っていくような姿勢が基本となり、売りたいものを売るのではなく、お客様が心から必要としている提案をするために、学びや努力なども継続的に続けていく必要があると思います。（稲垣 景子 営業アシスタント）



5Value Asset Co., Ltd.



5バリューアセット株式会社 金融商品仲介事業者 近畿財務局長（金仲）第437号

各商品等にご投資いただく際には商品毎に所定の手数料や諸経費等をご負担いただく場合があります。又、各商品等には価格の変動等による損失を生じる恐れがあります。各商品等へのご投資にかかる手数料等およびリスクについては、当該商品等の契約締結前交付書面、目論見書、お客様向け資料等をよくお読みになり内容について十分にご理解ください。

この通信は、当社ホームページに掲載するほか、当社セミナーにご参加いただいた方、業務提携をいただいた方、およびIFA口座をお申し込みいただいた方に送付しております。送付の停止・送付先変更をご希望の場合は、大変お手数ですが下記のメールにご連絡ください。送付の停止・送付先変更には、少々お時間をいただく場合がございます。

発行者：5バリューアセット株式会社 クライアント・リレーション

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1 丸の内永楽ビル20F

newsletter@5valueasset.com